

大人が感性を磨くことで

あるテレビ番組で、「名古屋の久屋大通にある階段で、多くの人が躓く」という不思議な現象を取り上げていた。どこに危険が潜んでいるかわからないものである。雨上がりや雨が降りそうなどの登下校で、子供たちが傘を折ってしまうことがある。それは、傘を杖のように突いていて、側溝のふたの穴に傘の先がはまってしまふことが原因となっている。傘も大切であるが、子供が転倒したらと思うと事前に防がなくてはならない事案である。

危険予知能力を子供たちに身に付けさせたいが、簡単なことではない。この予知能力は、危険を感じた経験との相関関係が強いからである。ゆえに、大人の方が危険を早く感じることができる。それではと、子供に危険な経験を積ませることもできない。大人が経験により身に付けた感性を、子供たちに伝えていくことが、必要となるだろう。それも、具体的な場面で。水で濡れた廊下を見て、「濡れている」ではなく「誰かが転ぶかも」と、水をふき取る大人の姿が子供たちの感性を磨くことになる。

さて、前述の名古屋の公園の階段は、各段の高さが微妙に違うらしい。そのわずかな違いに気づく感性が、私自身にあるのか疑問だが、躓く人を見て「もしかして段差が」と気付ける感性が、子供のためになることは間違いない。



バランスの中で生きる

ところで、先ほどの「躓く」は、「つまずく」「つまづく」どちらか？「稲妻」は「いなずま」「いなづま」？「頷く」は「うなずく」「うなづく」？「続く」は「つづく」「つづく」？「色付く」は「いろづく」「いろづく」？実は、「躓く」の語源が「爪突く」ではあるが、「ZU」と発音する言葉は、基本的に「ず」を使うことと、文科省が定めたルールに基き、ひらがな表記が決められている。ただし、例外がある。「続く」や「綴る」のように「同音連呼(つづ)」、「色付く」のように「語の連合(色+付く)」の場合は、「ず」ではない「づ」ということだそうだ。さらに文科省は、「ず」でも「づ」でも間違いではなく、どちらでもよいとしている。

ルールの中で生きる私たちにとって、この「例外」に理不尽さを感じることもある。また「どちらでもよい」という曖昧さが、私たちの判断を難しくすることもある。ただ、この2つがないと、息苦しくなることも確かである。私も生活を振り返ってみると、この2つを都合よく利用している。自分の「例外」「どちらでも」を許して、他人のそれは認めないということだけは、やめておきたいものである。決して傷をなめ合うわけではない。他の弱さを受け入れる心を、互いに持ち合わせたい。まっすぐ歩み続ける人は、なかなかいないものである。人は他者とのかかわりの中で、立ち止まっては悩み、引き返してはやり直し、道に迷いながらも共にゴールを目指すもの。自分と他者の思いや考えをすり合わせ、バランスを大切にしながら歩む力を、子供たちに育んでいきたい。

